

平成29年3月24日（金曜日）

「三方よし」の人間学 廣池千九郎の教え

②0すべての人が幸せになる経営



道経一体思想の提唱者・廣池千九郎(1866~1938)現在、大分県立美術館にて特集展示「近代中津の偉人と廣池千九郎」開催中(4/4まで)。お問い合わせ先：大分県立美術館 TEL.097-533-4500

今日の厳しい経営環境を乗り切るには、経営者と従業員が一丸となつて事業に取り組んでいくことが肝要です。労使が共に信用し、信頼し合える関係をしっかりと築いていくのです。

廣池千九郎（法学博士、1866～1938）が道経一体思想を説いた昭和初期は、深刻な労働争議が頻発し、労使一体とはほど遠い状況でした。そこで千九郎が経営者に指導したのは、日頃からの道徳的経営の実践でした。今回は「三方よし」の人間学（PHP研究所刊）より、労使一体、道徳的経営をキーワードに見ていきます。

幸福を願つて育てる

経営者と従業員とは、利害が相反するように思われている面があります。経営者が儲けるために従業員から搾取したり、従業員が悪条件の改善を迫つてストライキやサボタージュを行つたりする労働争議が、その象徴的なものといえるでしょう。

道徳的企業経営を実現するには、そのような状況から脱して、理想的な労使間の協調関係をつくつていかなければなりません。

労働争議が頻発し、労使一体とはほど遠い状況でした。そこで千九郎が経営者に指導したのは、日頃からの道徳的経営の実践でした。今回は「三方よし」の人間学（PHP研究所刊）より、労使一体、道徳的経営をキーワードに見ていきます。

ばなりません。すなわち、経営者は従業員の幸福を願ひ、十分な賃金を支払うとともに、従業員の品性を向上させるための道徳教育を行つていくのです。従業員からすれば、やりがいのある仕事をしながら給料を手にし、しかも自己の品性を高める教育をしてもらえ、念が湧いてくることでしょう。

経営者と従業員がお互いに品性を高め合つていくことで、労使が一心同体となつて働き、安心し、幸福を感じられるようになります。また、従業員が将来独立することがあれば、経営者はその人が立派に一人前にやつていけるように支援します。

経営者も従業員も、そして第三者も、すべての人が幸福になるような経営を志しましょう。途中の困難を乗り越えて、最後の勝利を得るのが道徳的経営というものです。努力の先に、大いなる幸福が訪れるのは間違いありません（同書収録「すべての人が幸せになる経営」より）。

千九郎が「企業は人づくりの公設機関である」と述べておられる道経一体経営では、企業の究極の目的を「人づくり」におきます。売上や利益は企業運営のために重要ですが、道経一体経営では、それは「人づくり」のための条件であり過程である、「人づくり」ができた分だけ、売上や利益が増大すると考えます。

そのためにはまずトップ自らが高い道徳心を涵養することです。そして、その後ろ姿をもつて、従業員を道徳的に感化し導いていくのです。「三方よし」の精神で、従業員やお客や周囲の方々との信頼の心で結ばれた、末広がり経営を目指していきたいものです。（公益財団法人モラロジー研究所広報部 ※本稿は今号で最終回です。次号より「廣池千九郎とゆかりの人物たち」をテーマにお届けします）